

主 題：旧約に見る神の救いのご計画 13

聖書箇所：創世記35-46章

きょうは創世記35-46章という非常に広い範囲の中から、ヤコブの子ども、その中のヨセフの姿を見ていきたいと思えます。教会学校ではヨセフ物語という話を聞くのですが、私たちは余りそういう物語を聞く機会がないかもしれません。しかし、このヨセフこそ私たちが信じるイエス・キリストの予型であると教えています。そのことを頭の片隅に置いて、これはイエス様のことを言っているのだなということを見ていただきたいと思います。

大体6年前から半年ごとに旧約聖書の話をしていただいておりますが、最近ではアブラハムとその家族を通して神様がどのようにひとりひとりをお選びになるのか、召されるのかを学んでまいりました。アブラハムは百歳にしてひとり子イサクが与えられた。そしてアブラハムはその愛するひとり子を全焼のいけにえとして捧げよと言われた時に、イサクを捧げたことを学んできました。そしてこのイサクにリベカによってエサウとヤコブという双子の子どもが与えられた。エサウの名前の意味は「赤い」、ヤコブは「かかとをつかむ」、あるいは「押しのける者」という意味でした。

I ヤコブに子どもが与えられる 創世記35-46章

1. ヤコブの12人の息子たち 35:22~

そしていよいよこのヤコブに子どもたちが与えられるというところを創世記35章以下で学んでいきたいと思えます。兄のエサウとの敵対を恐れて、お母さんのリベカは自分の兄がいるカランの地にヤコブを旅立たせます。その地において叔父のラバンの二人の娘を見て、ヤコブは妹のラケルと結婚したいと願うようになりました。叔父のラバンはラケルとヤコブの結婚を承諾し結婚式を挙げた。その夜、ヤコブはラケルの待っているところへ行き一夜を過ごしますが、朝になって顔を見たらラケルではなく姉のレアでした。叔父のラバンにだまされたということを聖書は教えています。ひとりの娘と結婚するために7年間働くという約束をして、ヤコブはラケルと結婚したいのもう7年、合計14年間働くことになりました。その間、それぞれの女奴隷とも関係を持ち、結局妻が4人になりました。その4人の妻から12人の息子たちが与えられたと記されています。

レアには長男ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンという6人の子どもが与えられました。実はこの4番目のユダがイエス様の系図に現れてくるユダです。長男、次男また三男を差し置いてなぜ四男のユダになったのかは神様の深いご計画があるということで、聖書を読んでいただいたら、なぜか解けると思えますので、ぜひ帰ってから読みいただきたいと思います。そして、愛するラケルからヨセフとベニヤミンというふたりの子ども。ヨセフが11番目、ベニヤミンは12番目です。その間、ジルバとビルハというそれぞれの女奴隷たちから4人の子どもたちが生まれたと記されています。

2. ヨセフと兄弟たち 37:2-9

36章は省略して、37:1を見てください。ヤコブに子どもたちが与えられて後、「ヤコブは、父が一時滞在していた地、カナンに地に住んでいた。これはヤコブの歴史である。」という書き出しがありまして、「ヨセフは十七歳のとき、彼の兄たちと羊の群れを飼っていた。」、既にヨセフは17歳、「彼はまだ手伝いで、父の妻ビルハの子らやジルバの子らといっしょにいた。」と、こういう状況になりました。

① ヤコブのえこひいき 3-5節

ヨセフは父親や兄弟とどんな関係であったかを私たちは見なければいけません。3節を見ると、ヤコブは「彼の息子たちのだれよりもヨセフを愛していた。それはヨセフが彼の年寄り子であったからである。」と記されています。聖書からは年を取ってからできた子どもであるからヤコブはヨセフを愛したと見受けられますが、ヨセフはヤコブが一番愛していたラケルから生まれた子どもですから、こんなにかわいがっていたのではないかと考えることもできます。いずれにしても、ヤコブはヨセフを溺愛していたということがわかります。「それで彼（ヤコブ）はヨセフに、そでつきの長服を作ってやっていた。」、ほかの兄弟を差し置いてヨセフに「そでつきの長服」を着せたということを見ることができます。英語の欽定訳では「いろとりどりの服」と記されていますが、白い布で床のところまですそが伸びていて、そでは長袖、その周りには金のモールがついているような、これは当時王族や貴族といった非常に地位の高い人たちが着る服であったと言われております。12人いた兄弟の中でヨセフだけがそのような服を着せられ、特別扱いにしたということです。よほどこのヨセフがかわいかったのかと思うことができます。

そして、ヨセフはそれだけお父さんからかわいがられていたから、とてもいい子かなと思ったのですが、そうでもなかった。2節を見ると、「ヨセフは彼らの悪いうわさを父に告げた。」とあります。いわゆる兄弟たちの悪いところを見てはお父さんに告げ口をするような言ってみたら性格の悪い子どもであっ

たようです。お父さんが幾らかわいがっていても、これでは兄弟はおもしろくない。自分たちは半そで、すその短い、汚れても構わないような汚い服を着せられて羊飼いをさせられているのに、ヨセフは長そでのすばらしい貴族が着るような服をお父さんは着せて溺愛していた。おまけに告げ口をする。兄さんたちはどうしたか——。4節に「彼の兄たちは、父が兄弟たちのだれよりも彼を愛しているのを見て、彼を憎み、彼と穏やかに話すことができなかった。」、また5節には「ますます彼を憎むようになった」とあります。

② ヨセフが見た二つの夢 7-9節

7節以下に、ヨセフが見た二つの夢のことが書いてあります。一つは畑で束を束ねていると、お兄さんたちとベニヤミンのそれぞれの束がヨセフの束の周りに来て、ヨセフの束におじぎをする。こういう礼拝行為をしたと。また別の夢は、9節「太陽と月と十一の星」、つまりお父さんとお母さんと11人の兄弟が私を伏し拝んでいると。私たちには想像もできない光景です。

3. 兄弟たちの悪だくみ 10-36節

① ヨセフを殺そうとする 18節

こんな夢を聞かされ、ただでさえ腹立たしい思いをしていた兄弟たちはやがてヨセフを殺そうと思うようになりました。11節「兄たちは彼をねたんだ」と書いてあります。12節、ある時「兄たちはシェケムで父の羊の群れを飼うために出かけて行った。」と記されています。長そでの服を着たヨセフは家で留守番をしていました。そのヨセフにヤコブが「おまえの兄さんたちはシェケムで群れを飼っている」、様子を見てきてほしいと言います。もし、無事だったら私に知らせに来てくれと。ヨセフは出かけて行き、ドタンという所でお兄さんたちと会います。(13-17節)

② 穴に投げ込まれる 23-24節

やっとヨセフが兄たちを見つけて近くに来た時、「彼らは、ヨセフが彼らの近くに来ないうちに、はるかかなたに、彼を見て」、長そでの服を着ている人は滅多にいないですから、兄弟たちは遠く離れて姿形がわからないような時からヨセフがわかりました。「あの夢見る者がやって」来たと言うわけです。20節「今こそ彼を殺し、どこかの穴に投げ込んで」しまおう、「悪い獣が食い殺したと」お父さんに言えばいいからと。確かに自分たちがヨセフを礼拝するという夢を聞いたけれども、その夢が本当に実現するかどうか、殺してしまったらそんなことはできないし、様子を見よう。こう相談している時に、長男のルベンがヨセフはお父さんが本当にかわいがっている子だから、いのちを取ってはだめだと言いました。

「血を流してはならない。彼を荒野のこの穴に投げ込みなさい。」、大体その地では水を貯めるために穴が掘られていて、ちょうど彼らが羊を飼っていたそばに穴があったようです。そこへ投げ込もうというわけです。そしてそのような相談をしている時にヨセフがやって来ます。兄弟たちはヨセフが着ていた「そでつきの長服をはぎ取」り、捕まえて「穴の中に投げ込」みますが、幸い「その穴はから」であったと記されています。

③ 旅の隊商にヨセフを銀貨20枚で売り飛ばす 25節～

そして兄弟たちは食事をしていたのですが、その最中にふと目を上げて見るとイシュマエル人の旅の隊商がやって来て彼らのそばを通りかかりました。そこで四男のユダが兄弟たちに、弟を殺しても得にならないから、あの隊商に奴隷としてヨセフを売ってしまおうと言います。そうしたらお金ももらえると。兄弟たちはその言い分を聞いてそうしようということになり、隊商が通りかかった時に「ヨセフを穴から引き上げ、ヨセフを銀二十枚でイシュマエル人に売った。」と記されています。「銀二十枚」がヨセフの代価であったと。「イシュマエル人はヨセフをエジプトへ連れて行った。」、こういう出来事がありました。

④ 父ヤコブへのうその報告とヤコブの悲しみ 31節～

そして、兄弟たちは、32節「そでつきの長服を父のところを持って行き」、私たちがこれを見つけました、どうか調べてくださいと報告します。お父さんはこれがヨセフのだということがすぐにわかったのです。その長服には雄やぎをほふった血がつけられていた。31節にそう書かれています。「ヨセフの長服を取り、雄やぎをほふって、その血に、その長服を浸した」。ヤコブはそれを見て、あの愛しているヨセフは亡くなったのかと「自分の着物を引き裂き、荒布を腰にまとい、幾日もの間、その子のために泣き悲しんだ。」と聖書に記されています。私も死にたい、ヨセフの所へ行きたい、それほどまでに思っていたのです。

⑤ ヨセフ、エジプトの侍従長に転売される 36節

一方、ヨセフを買い取った隊商の人たちは、エジプトでパロの廷臣、侍従長ポティファルという人にヨセフを売ったと36節に記されています。

4. エジプトにて 39:1～

そして隊商の人たちとともにヨセフはエジプトに着くのですが、39章を見ると、ヨセフがエジプト

へ連れて行かれ、ポティファルというエジプト人が彼を買取ったことが改めて記されています。「主がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人とな」った。殺されかかって、しかも旅の隊商に奴隷として売られたヨセフがなぜ幸運な人となったか——。人間的に考えれば、こんな不幸なことはないはずで、家にいれば本当にもてはやされた状態にありましたから、環境が大きく変わったのです。なぜ幸運かと言うと、3節に「彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た」とあります。大事なことは環境が変わったことではなくて、神様がともにおられたということだと聖書は私たちに教えています。主がともにおられるから、なすことすべてが神様によって成功させられる。

① ヨセフ、主人に愛され、全財産を任せられる 4-6節

だからヨセフは奴隷でしたが、主人はその家と全財産とを管理させた。そしてその時から「主はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を、祝福された。」「家や野にある、全財産の上に」主の祝福があったということです。全財産を委ねた、その取り扱いが書かれています。

② 主人の妻からの誘惑 7節～

けれども、いいことばかりではなかったということをもたはまた私たちは聖書によって教えられます。彼が17歳の時、「ヨセフは体格も良く、美男子であった」と6節にあります。だから主人の妻がヨセフに目をつけたと7節に記しています。事もあろうに「『私と寝ておくれ。』と言った」というのです。しかし、ヨセフは何ということと言われるのですかと拒みました。あなたの夫である主人がすべてのことを私に任せてくれた。だからそんなことはできませんと、彼は聞き入れず、そばに寝ることも一緒にいることもしなかった。しかし、主人の妻は毎日ヨセフに言い寄り諦めなかったのです。そしてどうしても必要があって、主人も家の者もだれもない時に、彼が家の中に入らなければいけなくなって、妻と二人きりになってしまったのです。12節を見ると、「彼女はヨセフの上着をつかんで、『私と寝ておくれ。』」と、またせがむのです。ヨセフはその手を振り払って、「上着を彼女の手に残し、逃げて外へ出た。」。どうしても言いなりにならないヨセフに、妻は家の者と呼んで、ヨセフが私に言い寄って乱暴しようとした、私は拒んで思わず服をつかんだら、服を脱ぎ捨てて逃げて行ってしまった、悪いやつだと言いつけたのです。

③ ヨセフ監獄へ 20節

17節「彼女は主人に、このように告げて言った。『あなたが私たちのところに連れて来られたヘブル人の奴隷は、私にいたずらをしようとして私のところには行って来ました。』と、全然事実と違う逆のことを言いました。「私が声をあげて叫んだので、私のそばに上着を残して外へ逃げました。』」、あなたの奴隷はこんなことをしたのですと。出かけていた主人はその「ことばを聞いて、怒りに燃えた。」と記されています。ヨセフを捕らえて「王の囚人が監禁されている監獄に彼を入れた。こうして彼（ヨセフ）は監獄にいた。」、こういう出来事が起きたと聖書は言っています。

④ 献酌官と調理官の見た夢と解き明かし 40:5～

ヨセフは監獄の中である出来事に会います。21節「主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた」ので、監獄の長は「すべての囚人をヨセフの手にゆだねた」。だからヨセフは監獄で「すべてのことを管理するようになった」のです。囚人であったヨセフが囚人の管理を任せられたのです。そして、献酌官と調理官というエジプトのパロの家来が同じ監獄に投獄されます。彼らもまたヨセフの管理下に置かれたのですが、この二人が夢を見ます。そしてその夢がどのような意味を持っているのか二人で相談し合うのですがわからない。すると、ヨセフが彼らに言うのです。40:8「それを解き明かすことは、神のなさることではありませんか。」、どうぞ「私に話してください。」と。それで献酌官と調理官がそれぞれの見た夢をヨセフに話し、ヨセフはふたりが解放されるという解き明かしをします。そして解放された時にはと私を思い出して私に恵みを施してくださいと願います。ところが、パロがこの二人を呼び出して、献酌官を元の職へ着けた時には献酌官はヨセフのことを忘れてしまっていたようです。

⑤ パロの見た夢 41:1-36

「献酌官長はヨセフのことを思い出さず、彼のことを忘れてしまった。それから二年の後、」と41章が始まります。今度はパロが夢を見たのです。41:1からパロの見た二つの夢が記されています。一つ目は、ナイルから七頭のよく肥えた牛が上がってくる。また同じく七頭の醜いやせ細った牛が上がってくる。やがてこのやせ細った牛が肥えた牛を飲み込んでしまうという夢です。もう一つは、肥えた一つの茎から七つの良い穂ができていいる小麦と、しなびた同じような七つの穂を持った茎が出てきて、しなびた穂が肥えた七つの穂を飲み込んでしまう。こういう二つの夢でした。この夢は一体何なのか、誰か夢を解き明かす者はいないのかとパロは家来たちに聞きます。しかし、だれもその解き明かしをすることはできなかつたと41:8に記されています。

その時、献酌官長が思い出すのです。監獄にいる間に私たちは夢を見ました。そしてその夢の解き明かしをしてくれたヨセフという囚人がおります。あの者ならば王様の夢の解き明かしをすることができるのではないのでしょうかと言うのです。14節に「パロは使いをやってヨセフを呼び寄せたので、人々は急いで彼を地下牢から連れ出した。」とあります。こうして彼は王様の前に呼ばれたのです。パロは私の夢を解き明かす者がいないので、あなたは夢を解き明かすことができると家来たちから聞いたから、どうぞ解き明かしてほしいと。ヨセフはパロに「私ではありません。神がパロの繁栄を知らせてくださるので。」と言いました。そこで王が見た夢を聞きます。その夢については答えはこうです。七頭のりっぱな肥えた雌牛というのはやがて7年間大豊作があるということです。そしてやせた七頭の雌牛はその後7年間穀物が少しも穫れないような大ききんが来るということを言っているのです。穂の夢も同じことです。だから王様、やがて来るべき7年のききんに備えて、どうぞ7年間の豊作の時にできた穀物は貯められるだけ貯めて倉に納めて準備しておいてくださいと。

私たちは台風21号が来るのはわかっていました。台風の経路やどれくらいの強さかは天気予報で大体わかります。でも北海道の大地震はわかりませんでした。本当にわからなかったと思います。当時のエジプトでもそういう時がやって来る。今は繁栄しているから気にならないだろうけれども、大ききんが来るから王様ぜひ心がけてくださいと。

⑥ パロ、ヨセフを重用する 41:37-45

38節を見ると、「パロは家臣たちに言った。『神の霊の宿っているこのような人を、ほかに見つけることができようか。』」、あなたは本当にすばらしい解き明かしをする神の人だと言っています。「神がこれらすべてのことをあなたに知らされたのであれば、あなたのように、さとくて知恵のある者はほかにいない」、だから私の家を治めてくれ、私の国民はみんなあなたの命令に従いますと。「私があなたにまさっているのは王位だけだ」と言うのです。だから王の次に位するような位置にあなたを着けるから、これからその備えを任せると言ったのです。

そして名前をつけます。45節にパロがヨセフに「ツァフェナテ・パネアハ」という名を与えようと。そして「オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテを彼の妻にした。こうしてヨセフはエジプトの地に知れ渡った。」というのです。この名前は「世界の救世主」という意味を持っています。エジプトのパロがヨセフに向かってあなたは世界の救世主だと。これから起こる出来事について、そのようなことを準備できる者、世界を助けてくれたのだからと。17歳にして兄たちを追って出て、隊商に売られてエジプトに来て、まただまされて監獄に入れられるという時を経て、その時ヨセフは30歳になっていた。41:46-48「ヨセフはパロの前を去ってエジプト全土を巡り歩いた。さて、豊作の七年間に地は豊かに生産した。ヨセフはエジプトの地に産した七年間の食糧をことごとく集め、その食糧を町々にたくわえた。」とあります。どれくらい多かったかがわかります。「町の周囲にある畑の食糧をおのおのその町の中にたくわえた。」、でも蓄えても蓄えても「穀物を海の砂のように非常に多く……量りきれなくなった」ので量るのをやめたとあります。

そしてやがて53-54節を見ると、「エジプトの地にあった豊作の七年が終わると、ヨセフの言ったとおり、七年のききんが来始めた。」、そしてすべての国に及んだ。でも「エジプト全土には食物があった。」、7年間蓄えに蓄えてあり余るほどの食糧があった。「やがて、エジプト全土が飢えると、その民はパロに食物を求めて叫んだ。」、王様どうぞ私たちに食べ物を下さいと。「パロは全エジプトに言った。『ヨセフのもとに行き』なさいと。あなたたちの食べる物はヨセフのところへ行って彼の言うとおりにしなさいと。「ききんが全世界」、世界じゅうに及んだと記されています。そして、その時「ヨセフはすべての穀物倉をあけて、エジプトに売った。」とあります。

⑦ ヨセフの兄弟たち、食料の買い付けにエジプトへ 42-43章

「ききんが全世界にひどくなったので、世界中が穀物を買うために、エジプトのヨセフのところに来た。」。当然のことながら父ヤコブと兄弟たちがいるところでも食べる物はなくなりました。でもうわさによればエジプトに行くと食べ物はいっぱいあるから食べ物を手に入れようと。42:1を見るとヤコブは「エジプトに穀物があることを知って、息子たちに言」うのです。「あなたがたは、なぜ互いに顔を見合っているのか。」、顔だけ見えても食べ物は手に入らない。私たちにはもう食べ物はなからエジプトに行って穀物を買って来てくれ。そうしなければ私たちは飢え死にしてしまうと。3節「そこで、ヨセフの十人の兄弟はエジプトで穀物を買うために、下って行った。」。「十人の兄弟」というと、一人はヨセフなのでもう一人足りない。ヤコブはヨセフがいなくなってから一番下のベニヤミンをどこにも行かせなかった。特に「兄弟たちといっしょにやらなかった。わざわざ彼にふりかかるといけないと思ったからである。」。だから彼らは10人で出かけて行ったと。

そうして42:6を見ると「ヨセフはこの国の権力者であり、この国のすべての人々に穀物売る者であった。ヨセフの兄弟たちは来て、顔を地につけて彼を伏し拝んだ。」とあります。ヨセフが見た、兄弟たちの

ねたみのもととなった夢の一つがここで実現するのです。ヨセフはこの10人が何者か見てすぐわかったと書いてあります。あれから20年たっても兄弟たちの顔はわかります。ところが17歳だったヨセフの顔は兄弟たちには認識できなかったのです。彼らを見てそれとわかったけれども、「見知らぬ者のようにふるま」って、おまえたちは私たちの国の様子を見に来たスパイかと言うのです。いえ、食べ物なくなったので食糧を買いにきたのです。いいや、やはりおまえたちはスパイだというやり取りが続きました。いいえ私たちは「同じひとりの人の子で」、ヤコブという父親がいます。そして私たちは正直な者で間者（スパイ）ではありません。兄弟たちはとうとう彼に「しもべどもは十二人の兄弟」がいましたと言ってしまうのです。カナンという所にひとりの弟を残して来ました。あとひとり——自分たちが奴隷として売って父親には殺されたと報告したそのひとりはいなくなったと、なくなった本人に対して言ったのです。どうしても食べ物を買って帰らなければいけないなら、兄弟の中からひとりだけ残してあとの9人は帰ってよろしいとヨセフは言いました。そこでシメオンという兄弟をひとり残して食べ物を手にして帰るのです。

43章を見ると、「その地でのききんは、ひどかった。彼らがエジプトから持って来た穀物を食べ尽くしたとき」、当然のことながら7年間もききんが続くのですから、幾らたくさん持ってきてもたちまち食べ物は食べ尽くしてしまいました。ヤコブは言います。「また行って、私たちのために少し食糧を買って来て」ほしいと。でもお父さん、今度行く時は兄弟そろって行かないと、置いてきたシメオンが殺されてしまいます。しかし、ヤコブはヨセフが死んでしまったのだから、このベニヤミンだけは絶対に外にはやらない、手元に置いておくと言います。でもどうしても食べ物を手に入れたかったらベニヤミンを連れて行くほかはありませんと、そのようなやり取りがあった後、ユダがどんなことがあってもベニヤミンは連れて帰りますと保証して、二回目の買い出しに行きました。

43：15を見ると「この人たちは贈り物を携え、それに二倍の銀を持ち、ベニヤミンを伴ってエジプトへ下り、ヨセフの前に立った。」とあります。自分のすぐ下の末っ子のベニヤミンを見た時、ヨセフは本当に感極まったと聖書は私たちに教えています。やっとベニヤミンに会えたから、もうお父さんたちに食べ物を持って帰りなさいと言います。そして29節「ヨセフは目を上げ、同じ母の子である弟のベニヤミンを見て言った。『これがあなたがたが私に話した末の弟か。』そして言った。『わが子よ。神があなたを恵まれるように。』」と。「わが子よ」と言ってしまうのです。「ヨセフは弟なつかしさに胸が熱くなり、泣きたくなくて、急いで奥の部屋にはいって行って、そこで泣いた。」、その後兄弟たちにご馳走を出すようにと家来たちに命じます。

⑧ 感動の再会 45章

そして、ヨセフは父親のことを聞きます。45：3を見ると「ヨセフは兄弟たちに言った。『私はヨセフです。』、お兄さんたち、あなた方が旅の隊商に銀貨20枚で売ってエジプトへ奴隷として売られたあのヨセフは私ですと。「兄弟たちは……驚きのあまり、答えることができなかった。」、びっくりしてしまって声が出なかったのです。殺しはしなかったけれども、奴隷としてもうとっくに死んでしまっているだろうと。お父さんにもそう言ったけれども、そうではなかった。ヨセフは言います。「『どうか私に近寄ってください。』彼らが近寄ると、ヨセフは言った。『私はあなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。』、心を痛める必要はありませんと。

どうしてでしょう？「神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。」と。ヨセフは神様があなたがたを救うために私を遣わしてくださったのだ、それは神様のご計画なのだからと兄弟たちに告げたのです。8節に「今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです。神は私をパロには父とし、その全家の主とし、またエジプト全土の統治者とされたのです。」。実にあの奴隷であった、憎まれ者のヨセフがエジプトの王の次の統治者として用いられているのですと。お兄さんたちはびっくりして声も出なかったのですが、こんな地位にいる弟のヨセフ、自分にしたことを考えれば私たちは無事にいられるはずがないと思ってもおかしくありません。でもそうではなかった。神様がそのようにされたのだからお兄さん気にしないでと。そうしてお父さんを連れてきてくださいと言って食べ物を渡すと、やがて父親を迎えにやったと記されています。

非常にすばらしい結果を私たちは見ることができました。なぜかわからないけれども、私たちも周りにいろいろ理不尽なことが起きます。愛する人を亡くす、大きな病にかかる。財産がなくなってしまう。被害に遭う。神様を信じている私たちになぜこのようなことが起きるのだろうと考えることはないでしょうか？でも神様がともにいてくださって、このことすべては神様がされたことだからとヨセフは言うのです。私たちの目にはその時不幸だと思ったことも、やがてすばらしい結果が待っているということを教えているのです。

II. 新約聖書の解き明かし

1. 父なる神は子なる神イエスを愛された マタイ3：17

「また、天からこう告げる声が聞こえた。『これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。』」と、天、すなわち神様の住んでおられる所という意味ですが、そこから聞こえる声は神の声ということです。神様が「わたしの愛する子」だとイエス様に言われたと記されているのです。これはバプテスマのヨハネによって、イエス様がバプテスマを受けた時の出来事です。

2. イスラエルはイエスを憎んだ ヨハネ1：11

兄弟たちがヨセフを憎むように、イスラエルの人たちはイエス様が来られた時に快く思わなかった。ヨハネ1：11には「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民（イスラエル）は受け入れなかった。」と書いてあります。不信仰なユダヤ人たちであったと教えています。

① 迫害を受けたイエス ヨハネ5：16

ヨハネ5：16には「このためユダヤ人たちは、イエスを迫害した。」とあります。「このため」というのはイエス様が安息日にある一つのことを行ったからです。ベテスダという池のほとりに38年間も病気を患っていた人がいたのですが、その人を癒してあげた。安息日にこのような行為をするということは律法を守っていない証拠ではないかと言って迫害したのです。

② 銀貨30枚で売られたイエス

またイエス様は裏切り者のユダによって銀貨30枚で売られた。イスカリオテのユダが銀貨30枚をもらってイエスを敵に渡しました。ヨセフもまた兄弟たちによって銀貨20枚で旅の隊商に売られていったということです。

③ 殺そうとし、殺した マタイ20：17-19

ヨセフは兄弟たちから殺されそうになりました。マタイ20：17-19、イエス様が弟子たちを呼びます。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。』」、イエス様のことばです。

④ 地の低い所に下られた エペソ4：9-10

また、エペソ4：9-10には「——この「上られた。」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。……下られた方自身（イエス様のこと）が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた」とあります。ヨセフは穴の中に投げ込まれました。イエス様もこのようにして下られた。十字架に架かって死なれた後、「地の低い所に下られた」とあります。具体的な穴ではなくて、基本的には死が支配する場所ということになりましょうか。

⑤ よみがえられた 使徒2：23-24

使徒2：24には「神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」とパウロが言います。

3. イエスはイスラエルを愛された

そして、イエス様は十二人の使徒を遣わします。マタイ10：5-6「そのとき彼らにこう命じられた。『異邦人の道に行ってははいけません。サマリア人の町には行ってはいけません。』、どこへ行くのか——。「イスラエルの家の滅びた羊のところに行きなさい。」と言うのです。

4. イエスは教会を愛された

そしてイエスは教会を愛された。エペソ5：25-27に記されています。「教会」というのは「召されて呼び集められた者の集まり」という意味です。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、……しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分（イエス・キリスト）の前に立たせるためです。」というのです。ヨセフの兄弟たちもヨセフの前に立ちました。兄さんたち、私がヨセフだと言った。彼はこのことを本当に感激して泣いたということを見ました。

黙示録には子羊の婚姻の時が来ることが記されています。19：7-8「花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。」。教会はこのようにしてイエス・キリストを花婿として迎える、子羊の婚姻の時が来ると言うことを言っています。

5. 再会の時

① わたしはイエスです

やがてイエス・キリストと再会する。その時イエス様は「わたしはイエスです」と言われると。使徒9：5にサウロが天からの声を聞くことが記されています。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声があった時に彼は「主よ。あなたはどなたですか。」と尋ねます。すると「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」と天から答えがあって、サウルはこの方はよみがえりのイエスである

ということがわかったのです。

② 神がイエスを遣わされた

ヨハネ3：17には「神が御子を世に遣わされた」と書いてあります。それは「御子によって世が救われるため」に神様は愛するひとり子を世に遣わし、そして十字架につけて死なせてくださったと聖書は教えています。

終わりに：——私たちの責任——

私たちには大きな責任があることは確かです。北海道の人たちは電気がなくてテレビが見られない。食べ物もすぐ手に入らない、交通も阻害されている、それよりもいのちが危ないような状況下にあつて、こういう状況だから安心しなさいとは言えなくても、せめて大丈夫だということは教えてあげる必要があります。同様に私たちも何も知らない多くの人たちのために課せられた責任があります。ルカ24：45-48には「そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。『次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。』と。また1ペテロ2：9-10には「あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民」、わたしの所有とされた民です。皆さんはイエス・キリストを信じて神様によって選ばれた種族になった。聖なる国民とされ、神の所有となった。それは「やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」、これが目的だということです。「以前は神の民ではなかったのに、今は神の民」ですと。「以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。」、私たちの行いや努力ではない。地位でもなければ財産でもない。ただただ神様のあわれみによって私たちは今この地上に置かれている者だということです。

こんなすばらしい立場に置かれている私たちですから、私たちの責任をぜひ果たしていかなければならないということです。確かにいろいろなことがあつて、私たちは生活に不便を覚えたり、また多くの人たちとの間に関係が複雑になったりすることもあると思いますが、そのような中にあつても、あのヨセフのように生きて行く必要があると。神様が皆さんとともにおられるということを知って、どうぞ歩んで行っていただきたいと思ひます。